

特輯号の刊行に際して

Itazawa, Takeo / 板沢, 武雄

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

1953-12

特輯号の刊行に際して

教授 板 沢 武 雄

法政大学史学会は機関誌として昭和二十五年九月以来「法政大学史学会々報」をもっているのであるが、今回第六号を出すに当つて誌名を「法政史学」と改め、改題の初号を本会の生みの親であり育ての親である会長藤井甚太郎先生古稀祝賀記念誌として特輯刊行することとなつた。僭越ではあるが、関係職員中会長に次ぐ年長者の故を以て、いささか申し述べさしていただく。

藤井先生は旧黒田藩の名門に生れ東大國史学科を卒業、多年澁沢家の徳川慶喜公伝及び文部省の維新史料の編纂事業に従事せられて、維新史明治史の權威として重きをなし、京大・九大・東北大等諸大学の講壇に立たれ、現に本学文学部史学科主任教授、実践女子大学教授、日本歴史地理学会々長、開国百年記念文化事業会理事等の要職にあり、公私共に多方面にわたつて活動せられていることは、改めて申すまでもないことである。特にわが法政大学の史学科と史学会とは名実共に先生によつてその基礎を確立されて今日に至り、且つ先生あるによつて前途に多大の光明を期待しつゝあるのである。

この藤井先生は本年三月二十五日をもつて芽出度古稀の壽を迎えられたのである。先生は御承知の通り頗る御健康で、御活動ぶりも壯者を凌ぐものがあるので、古稀の御祝などとお年寄扱い申上げるのは如何かとも考えないわけではなかつたが、実は還暦の時に既に有志の間に祝賀の計画があつたにかゝわらず、戦争のためにお流れになつたという事情もあるので、今回は是非大々的に先生の古稀の壽をお祝ひして、今後益々お元気で御活動をお願いしようではないかと関係有志の間で忽ち議がまとまつたのである。われ／＼法政史学科の関係者としては先生の学恩の万一に報

いる好機会であるので、進んで藤井甚太郎先生古稀祝賀会の事務一切を本学史学研究室でお引受けし、発起人各位の御指導御支援のもとに着々会務を進め、五月二十四日新緑の日曜を卜して上野精養軒で先生令夫人令息を御招待申し上げて盛大な祝賀晩餐会を催し、席上記念品を贈呈いたしたが、万事なごやかに少しの無理もなく予期以上の成果をあげることが出来て、今更の如く先生の学徳に対して尊敬の念を新たにされた次第である。

さて右の祝賀会とは別に、法政大学史学会主催で、五月二十三日午後一時より本学学生ホールで、藤井会長古稀祝賀記念として先生御専門の一分野である「明治文化」公開講演会を催した。本会が毎年秋に開いていた公開講演会を今年特に春に繰り上げたのである。

藤井先生は「明治初期に於ける日米文化交渉」について、木村毅先生は「明治政治史に対するジョージ・ワシントンの影響」について、本学総長大内兵衛先生は「科学史に於ける時代区分」について、隈元謙次郎先生は「明治の美術」について夫々有益且つ興味深い御講演をなされ、聴衆また堂に溢れる盛況であつた。この時の速記と依頼原稿とをもつて単行本を刊行したい計画であつたが、都合により本特輯号となつたのである。改題の初号が諸先生の堂々たる玉稿をもつて飾られたことは、本誌の前途を祝福するに足りると存じ、感謝に堪えない。

終りにのぞみ、藤井先生の御健康を祝すると共に、総長大内先生文学部長谷川先生をはじめ本学当局の諸先生の本会にお寄せ下さつた御厚情に対して、深甚の謝意を表するものである。